玉川上水通船研究会編著：『玉川上水通船史料集』

㈶たましん地域文化財団刊　けやき出版発売

1998年11月　A５判　399頁　2,500円(本体)

そもそも，本書の刊行のきっかけは，「玉川上水通船一件」という，東京誌料として，長らく東京都立中央図書館に蔵されていた史料を読み進めるために，編著者グループの前身である，玉川上水通船一件を読む会が活動を開始したことによる。その成果は，小冊ながら，玉川上水通船一件を読む会編（1992）『玉川上水通船ノートⅠ・Ⅱ』として刊行され，元文３（1738）年以来繰り返し請願され，明治３（1870）年に実現した玉川上水の通船事業への注目を喚起し，当時，講演会なども催されたように記憶している。

今回紹介する『玉川上水通船史料集』は，実際に開業に至った，明治期の通船事業に関する史料を網羅的に採録することを目的とし，

序（２頁）

通船史料への招待（６頁）

Ａ．玉川上水通船一件（全冊・133頁）

Ｂ．玉川上水諸窺簿（36点・51頁）

Ｃ．諸家文書（150点・129頁）

Ｄ．日記（７点・９頁）

解説（９篇・56頁）

あとがき（２頁）

の構成となっている。全399頁中，見出し・解説などは80頁ほどで，まさに「史料集」に徹している。これは，読み手である我々に，通船事業に関する基礎知識を求めているのであるが，前述の『通船ノート』の刊行や講演会を通じ，通船事業の存在をアピールしてきた成果が出ていると考えてのことなのだろうか。

特に，基礎資料となる「通船一件」が，添付絵図を含めて，全冊載録され，同じく東京誌料として保管されていた「玉川上水諸窺簿」２簿冊中から，通船事業に関連する項目を抽出して採録している。どちらの史料も，必ずしも通船事業が実施されていた明治３（1870）年４月～明治５年５月の同時代史料ではなく，その後に筆写転記されたものであると考えられるが，所轄官庁側の史料としては，現段階でこれ以外に存在せず，今後の研究の深化のために重要な情報源として注目できよう。

従来，本書のような史料集の刊行は，自治体による市町村史刊行事業の一環として行われることが多かった。このような場合，自治体に関する史料採録が第一義であることから，その枠を越えて史料収集が行われることはまずない。しかし，本書は，自治体の枠にとらわれる必要があるべくもなく，たとえば「Ｃ．諸家文書」は１区10市，「Ｄ．日記」は５市にわたる史料を載録し，“多摩”という地域全体に関わっていた通船事業の位置づけを行っている点も評価できよう。

「通船一件」・「諸窺簿」のいずれの史料も，膨大な情報が含まれるが，６年の歳月をかけて活字化された努力には脱帽するしかあるまい。評者は，両史料とも眺め読みしかしていないため，改めて活字化されたものを見ると，結構読み残しがあったことに気がつき赤面ものである。

原史料に直接当たることは，大原則であるとはいえ，収蔵者側の意向により，ままならないことも時としてある。両史料とも，公立図書館が所蔵しているが，写真撮影などに制限が多く，また傷みも相当ひどい状態であり，資料保存の観点からも手軽に利用できる良質の史料集の存在は貴重なものであろう。編著者は，本書の刊行に当たり「通船一件」・「諸窺簿」のマイクロ撮影も行い，紙焼き本を，発行元の財団で，閲覧できる体制を整えたとのことである。

さてここで，何点か敢えて苦言を呈してみると，まず通船事業の位置づけに関して多少の疑問をはさみたい。編著者は，玉川上水通船事業を，甲武鉄道（現JR中央線）・青梅鉄道（同青梅線）の前史としての位置づけをしている。そもそも，通船計画自体は，元文３年，明和７（1770）年，慶応３（1867）年と，過去３回出願されている。元文の出願は江戸町人からであったが，他は在地の豪農層が主導して請願・実現していく経緯を有している。編著者は，実現した明治の通船事業に関する史料を提示することを目的としているため，詳述を敢えてさけたものと思われるが，近世中～末期において，江戸地廻り経済圏内における商品流通経済の充実が，多摩地域での大量物流機関の実現を要求したと解釈すべきなのではないだろうか。解説の中に，「玉川上水の船に乗った人々」という１篇があるが，関心が貨客の“貨”に向かず，“客”にのみ向いていることが残念である。

また，同じく通船の運航日に関して編者者は，月６回の定期運行であったとする解釈を行っている。横浜開港・帝都建設といった大消費地の後背地である多摩において，商品流通が，この程度で事足りたかという疑問が残る。実際，「Ｄ．日記」

部分を見ると，同一の河岸であっても運航日がまちまちで，原則定期運行・実際には必要に応じて出航という運行形態がとられていたと考えるべきではないかと思われるがいかがであろう。

次に，収録史料に関しても少々物足りなさが残る。敢えて苦言を述べる，というよりは，『玉川上水通船史料集　補遺編』の刊行を期待しているのだが，本書は「通船一件」・「諸窺簿」以外の部分に関しては，主に刊本，もしくは現在公開されていて，閲覧可能な史料を載録することを目的としている。つまり，手間と時間をかければ本書に載録されている史料のほとんどが入手可能なわけである。前述のように，実際には複数の市町村にまたがって所蔵されているので，かなりの労力を必要とするが，いずれにせよ，数点の例外をのぞき，既知の史料ばかりで，目新しさを感じさせるものではない。

今後是非補足してほしい史料を挙げると，近代ならではの新聞史料が欠落している。刊本という載録基準からすると，中山泰昌編（1934）『新聞集成明治編年史』（財政経済学会刊）に関連記事が採録されていることを指摘しておきたい。また，通船事業を主体的に推進していった「砂川家（立川市）文書」，「田村家（福生市）文書」の両者がほとんど欠落しているために，未解明な部分が残ってしまう。両家文書とも，既に存在は知られているものの，所蔵者の意向により現段階では公開されていない。かつて，個人の力で調査を行った際にも，当分公開をしそうもない雰囲気があったが，編著者の今後の健闘に期待し，是非とも両家を含め，未発掘史料を載録した『補遺編』なり『増補版』なりを刊行していただきたいものである。その際には，物揚場・船溜といった拠点設備の詳細を描いた多数の添付絵図のカラー図版を何点なりとも載せることを期待する。

（天野宏司）